八夕暮集

五德五

中村俊定文庫
文庫 18
167

八多暑集

序

正德甲子の古世しい伊勢宮
源義経家系の[illegible]
[illegible]さらしに抹木一巻
の不[illegible]を[illegible]
附句いれ[illegible]
[illegible]

乃家選

陵宝藏

此支那にて絵の手本に波をふ
けりへるかりを見し人にくれ
わてみさ模て泳に七ところ他の
泉河紙ともへあるを小松に
河北なる一連房あるへしとて
それを名月のなかれにかく
宴にハ蓮二房はなくとあめ
八夕香乃あたへ帰紙帳してける

是とも小松の河南の一連房あるを
かり杯八曲のうちにも掛物に出
色もさところ模に相對しこころ
名の一川をもさうも其筆紙
様の色のあらはれいたるを
風雅なるんにはんい雅と暮四
出居この記みして八川も七川
こもす露盤をとなふまして、を

れふしの松の南わきなる
さはなる七さいの七番ゐんに
此八幡の宮乃八幡てゐ
新こ所ゝ馬場ゝ置て暑西
のゆゝ式ゝ似ゝ所ゝ
古式ゝ石新宮ゝ所ゝ八月に
八月宮中ゝ所ゝ新宮ゝ
番ゝ二ゝこの一ゝ蓮二番の一世話

奥ゝ
西行の略ゝ
寂蓮乃ゝ
ゝ
ゝ
古式ゝ
ゝ
ゝ

八月

此頃の暑さ終るとなく大事
をもて慎しして撰者のおもよ 蓮
あるもの河水のくいいさし
らに沖南の遠山霧もあらん

九月三日

為二石 蓮人

百韻

夕暮秋かぜ吹ぬ村雨の 蓮二房
いつをも秋の梢に撰歌 乃為
ふるいふるとも月の宮小清 宇中
ゆゑ一種沼をや 蘇吹
捧ゆゑ猫を添て 尚流
ゆゑの為に抽ぬ 和什

中村俊定文庫

蕊のふかい牡丹のちいめりさ咲　昌柯
緑色に背景に紅色ちらちら咲　友玉
行くに裾に袴のちらと見えて　京弓
角いたるに赤てまゆしと　何笠
柳絮まとの屋さらやんもくもと　文宋
ナ川ふ川うまとんゆるつ世つき　寸石
際景る名古屋に兵の張り　之川
松の陰に寝ぐ赤すすの　之

陸士のふ沈星と神武ぬ初、　筆
世所ふて　秋に夕の　房
春屋ちわ月も桂の汗男沉　窓
窓林のもも山ものもと使す　中
高天京ふ使たちちと明きと　吹
陳ふちちとしくに中　流
京屋に京ちち人使いち乳盗　什
雑子ち跳合子ち久窮　柯

蕨畑のみ石ずしに彩られて　圭

鎌倉に弓の字兜婆一本　弓

浪笠に鎌の長人をふる人を　笠

名を問へば相模　宋

赤旗のそまにたれなる豊弼　昭

頼朝公の七年　居時　川

元服式ちかへんとて弓　人

鶴を建てよ明神のお　嶽

夕暮に牛房ぶくんと流れを　房

汎さんとして芋の葉の月　吹

丈山は世をしぬ式さげて　曹　中

さらさ学して玉拂ふ末　什

玉拂ふ解式つけとて　流

高にふまれさ川山茶花　弓

生花のたやにかゝれる竹箒　柯

俗に手紙はさをさいく　笠

玉
昭
宋
房
川
人
彦
中

吹
流
引
柄
什
玉
笠
宝

人の口ずさむ唄にある秋の風　昭
玉緒は世界に月い行く秋　京
宿徑も南蛮西行と略唱て　房
古塚ふるふる風も広ある者　川
一炷は仏座にうみ果枯荒　人
金秋ふる悲田も拾　吹
角文字はいろ鶏は半弦祭　中
はてふる有てふる　什

雲とかと山ふと起て相撲をと　流
ふりくる馬場と箱階ふる　引
田楽も子は矢先は石を焼　柯
翌翌に拍子つけて法　笠
さ法や宮は古る月夜　虫
俳は坊ンの立ふる　昭
はあるる不安内ある風法寒　宋
すへまとてもとの麦わら　人

禁のこれ法華を聖あり　川

大工は行基折り葦　中

山蔭をさいてゐるる芳流　為

矢鴨の文り萩は夕香　房

さ育の雪ふる谷甲賀もれん　什

玉つ玉つ玉の波見は新　派

かきくれ紙焼ハ宮人の芝石見り　吹

ゐるをほゐるゐゐゐるゐの日　柘

知手ハ通る小袖紙うやうて　弓

版は出来は　天下太平　玉

唐の字と名字中ある夏色　笠

三塔一の地　信長　月　宋

数ゐるは夕香ゐも和の猪　房

狭遊論と別物集あり　川

信玄紙ゐ以つ版を部を打て　昭

ゐを法のゐ法の法大拓　為

言くもるすハナ月のまくら　人
嵯峨さゝ原さそ松の風　吹
川舟よ淀の茶袋　泊わくく　中
寄ゆ孔ちや母ゝ姑の　什
多ハ丈ま寸ま淀伊家の壬生家　流
常に標の家ゝて　元　引
春ハ中けと高あ山ゝに山くと　柯
暫ハ廣をかく恨ハ長風ゝら　笠

月　和尚やゝれるつさの公家ゝを　主
ゝゝゝの立ゝ山ゝの汁講　昭
馬の子ゝ逃ゝ紙杵て追まハし　宋
ゝゝ月ゝ為ゝ淀居　板橋　人
為ゝゝ月杵ゝゝ波ゝ　川
柳さゝゝもゝ川ゝ夕暮　房

三ケ条大事

其辨　蓮二房

一以小伝ハ芭蕉門おゝ廿五ケの條目あるて
先師い洛ゝ去事ハ記後に
東西坊に伝ハ外い五條十條ゝ伝写のゝ
みゝて全部口授の人とハ嘗い天下に三四人
らゝ如是伝ゝ今ゝと蕉門い世上に廣

さりて先師の武法い武埜に強き者を右翁
の血脉い湖東に伝へ師と永くも面門
ハかさも古式武法血脉い伝へ多ちん俳諧い
何のひとつ虚実い何の変化ある
ものと芭蕉翁の仏法伝へ人ハ伝へ揺に
方貴の法やをゆつを馬に仏経法を
にもやうに見るあの喜ふもも口おし
さまとその全部を伝へ人ハ三四人い俳諧

にもの思量ある人より先師の報恩に真実
ある人ハ伝へ新迹ハ正法法花所報ハ附属
して分別いさ門ハ之法文例ある色し
今の達二房も門ハ多ちと年
ハ三越後の金波多伝へを越中ハ安房に
十百前ハ作法を後し世小松ハ世云八月
の古式を云ふと一巻ハ中ハ伝
ハ池数奇ある達二ハ一時書ハ之

かくて家の橘も一度の方便流あるを
実いまを語れ格例成張し吳名九月
の故実をはかるに是山松の形見とも
いはんやしかしや世上に三ケの大事を
いのるとて用おれ境を求むた
庭おに世三大事ありて庭前接兵
法実あるに部日九の為仁あ年
あるに世ケいあ所のあれ一名あるて

接と菊との二字に付て古人もさ
にたるべきを木免い秋のものあるに
あらねいあとをあ秋ら世ふ世を庭た
おらるもあるあ屋を接九枕ふい接を
遊行て彼を接い寄を恵九ら
めとあ世にすきい面さしも面
たるあを今い稲ある世面の為に
たるべくつく面世

此物語家に新蓄者は秘書
なるべい新茶の味わい所まで
刈い冬ふ星を吟ふい拾ふ仕舞の
此家成ふさり所の秘紙を
ひろわを金を新此家の貴敬を
誂をを切の秘伝とい云ひ〳〵芭蕉翁
の新或とやん成を自ら家に遠二房
の御伝をどといい物語ふ者

木樵歌

木樵の宿に泊まれば木樵人
夕日子ふを物庵は蜻蛉　留柯
山里の月と車引捨て　和什
白い中ふも黒い山里笠　人
御塔は嶺いざ川留　柯
宿泊する所の紫は泥　什

相合のまくまめ　人
伽の名字を　可一
古里社智恵の法も　什
与をさしゝ　人
地ゝい月　柘
笛沢ゝゝ　什
東京人　人
文箱と　柘

節供　人
十五夜に　人
燕いの　柯
ゝ　什
養父入　人
位牌に　柘
糸夫人　什
小松に　人

笠粽
月をく雨
苗をくゝ
遊て毒
身怪
神もさし
ゝの冬枯

六月ばかりに逢て侍りし

金輪の名ぬしなめる古文字　什

石壇の苔の上のとゝまれる　人

名ぬしのちるを惜てなれる　柄

逢坂の関の藤にくもりなき　什

月の影さへ清水の　人

惜すてゝ去る花の名ぬしを　柄

惜むなとゝ　什

高くゝや柳馬場に暮ぬる

白ハセて行青見原　柄

小倉にゝ鹿さ両く中宵破し　什

捧つれてゝ　人

鹿の本伝ばかけ為る　什

ゝ雪まもや　柄

木兎

木兎や柿木に居を嘆ぬ点　之川

巌にさ川せて蛍飛　宇中

掌配よりもやすと秋の海言て　雪弓

はいかを一いに福寿に　盃川

むてゝとそはいの山外猫に入ゝて　中

洞穴打絞りて虎る板松　弓

住吉社者といふ松成ゝ事

高の中に世界ゝ川ゝ　川

川の百に四石頭白も洞里果　甲

むゝ世外絞を拾成ゝ　弓

名みゝゝ喋りゝ外ゝゝ　川

身のうさやまに山海本　中

ゝと事の節世界も見物て　弓

ゆゝより袖のうに帆の丸　川

中

小奇麗にあやしらの岩は滝さ成
りてまことさらに猶の高くなる
薄霧にさゝしの月は孫ゆ
迷もおろさてもくらるる
白雪にかゝる西風に下ち落
八日は晴い　高雄岩神
降ても降い木履たく所
原石の雲理い今にうめに

引　川　中　引　川　中　引　川　引　川

うてこゝて茶臺は兵の西風
宝の山岩居　注仏不能
高石い樋うゝ紙　滝は音
はたらくやるう木ふこ
誰やらいるんは猫も笠さに
物うたんさ落ゆ月新
七夕の弦ないうは見やま
西所ふまるるは袖ゆ

中　引　川　中　引　川　中　引

駒かてる駒くやうるうるうて　川
ありやくくやうを六月も　中
長尼殺搗まうとのぶ法ゆり　弓
清明ない又　立助了帝　川
高尾ふいなを北部の高咲く　中
ちちみや　子代了蓋北室　弓

彰考而表

乃露

彰そくやあらはにくるるなる　相撲　何笠
祝の沢もるること　相撲　何笠
さよ沢くを中北月の林なる　文宋
蓋損このよ　村のかり搗　高
くるるけてたりいと笠北搗　笠
普請奉行の澄に墨ふ立　宋

はるばるとも油ぬいるたぶの冬　彦

谷七郎　このすりて後合　笠

すきぬて社仕ふいちんとの　宋

一里ばかりこのうつ見る白雲　彦

月のかる青田の中の　紅屋　笠

ゑるとぬるうるい嫁の姿　宋

振巴に行かも舟の川岸のひ　彦

言ちらくをうめうら振て行　笠

百姓も志賀の郡は　古屋風　宋

不ふかるか若のあれさ大黒　彦

竹垣の地ゑにゑは　ゑかん　笠

ゑへの　揺て帳も寝さた　宋

振袖のまちさるさ尼の中ま　彦

泊も　仕ふ　居足　亀ゑる　笠

挑灯のふを仕やうゑ和迫ま　宋

師走の　冬ふ　徒いつこの尼も　彦

万葉もろ徒の宮とよんなて　笠
真吉に見やる　橋姫は宮　宋
里人のつるを伝へと　鶴等ふり　彦
白雲のうらなんやれ　笠
清雲もうつるらは砂伝　宋
子易まれは伝に名の立　彦
三日月紙写徒て書た彩時百　笠
秋の芙蓉若いちゝめんのやら　宋

ウ　汐掛にえうを紀蜂は張りなて　彦
えをへいゆ見門のさし拾　笠
寸白もをにうるて行ふきや　宋
は新徒の中に稲を紀合　彦
公宮は立ち加賀も近江も出ふて　笠
去ちゝ雲さてを蓉乗孫室　宋

四季混雜

一万々春部 [illegible]

[illegible] 神保鉞 漆荒

同 春 軸 [illegible]

[illegible]の[illegible]や天に[illegible]て月に[illegible] 土房 見弦 井ナミ

[illegible]事 [illegible]の[illegible]ぬ[illegible] 赤化

草木[illegible]や[illegible]春[illegible]雲[illegible] 可夕

う鉢に麻のおうしや麻の香　行人
なれ恋の麻なるや秋の雲い綿（ミクニ）　肝象
麻の長さんらりなんの時雨　宇中
弱ひい沙平は冬ものさうり　里冬
山畑やいもをとさみ〳〵麻　乃鶴
野の麻の角中に麻し　和の色（ミノ）　馬伯
麻の花や麻の風に翌邑法師　文宋
作さにおらさて　涼〳〵天の川（ミノ）　右苞

新山のうぶ麻や麻に法師　夕市
長麻に成　祥にうけて移うるか（フノ光）　胃曲
吟〳〵附合わ名て　さう移の色　越系　伯苑
麻の花ものもらうも世麻　山視
竹の葉の行ものうの九月　石勅　宇白
麻の色の焙炉に麻て吟〳〵（フノ光）　巴兮
待ふ〳〵麻の本法の裸牛　之川
うつ〳〵り知ものに〳〵麻の色　乙市

稲妻やひかく見に行ところ　呂柯

有明の里一川二川雲雀なる　和什

路の霧る松と沸にしも薄れ　ミノ　六之

有るうちも名残て飛れ合ん　雨弓

一夜文宋亭に宿り

こまりもて

労紙かけ　松君

枕得る

椎や西ぬ鳥も行の北よ紀　青みも程　涼莞

家家残かけ捨て涼　一構半　文宋

七夕や裾あふ絶えちる　一葉　春莊

くるりへ牛飯もまき出帰さん　只三

氷室ふう上る宿や蝉の声　桑吹

背えの里残て嵐や帰りなむ　友直

社をほさまりてつめる夜を待　廿ノ三　林紅

川に留て馬追れ帷子に移るふ　何笠

晴るん保将馬れ行まで来を　孤衿

ひ尻海に糸のき捨てやきらくに　ミクニ　播東

武蔵国や白菊名も四葉花（ミクニ）　翠之
おりてとて祇の岩戸や折る月　秋海
をいわも苏苏苏　彩の弓仙也　北人
御の足雪八月や　笠木立　之仲
ふる風の音一番や古わき　柳　尚流
碧文を時につきうる夷講　理庸
大内宮や弓ちる紅葉　松　寸昭
芽指や苏苏苏苏つつ（ヤスイ）　嵩吹

雪のふる山武　移れ足しくる　見法
出女の柱子志えし　移このふ　乃彩
紅葉の俳句名川　柳　伯兎
洗濯の竹は之つき　移れ（フク光）　巴兮
ためりを雪苏苏苏　松さを　金仙
入あに天地せえしくるふ月　千人
名月や霊情孫子出の声（蛙編）　吾秋
元祖のたくさんくるふ音月（ミノ）　東羽

秋と叫ぶ雲の影や峯の月　野航（ミノ）

月代ぶまちてやゆ山のふもと　条吹

踏枯てるかたを照す月夜かな　巴兮（フクモ）

金屏に志ひらく是も月ぞかな　栖雨（魚洋）

千金の弓をいさらつや秋の月　倚友（口）

千金や一文もなしけふ冬の月　三号

只蓬追悼

玄玉の風ふかぬ本の苔のこいしこのに　亀堂

葉柳に金沙の月や猫の声　只蓬（モ人）

七夕の八起のあやかりもこと　貫北（イセ）

はたの花やあるまの他人かな　之川

はたの花やあるまの他人かな　和什

流る舟かけて夏氏ぬること　乙甫

菌狩や生戒をやかうまし　秋汐

一張弓ゝゝ狩てるとこの夏やら　桑仙（野角ツヘ）

ひけのふる山のふらいナ夜ふか　音吹（マスイ）

[illegible]　之川
夕虹や[illegible]　行人
村雨の生い[illegible]　青弓
東[illegible]八坂の塔や[illegible]　只三
波[illegible]　一味
[illegible]のスウを[illegible]　志弱
[illegible]の名やスーさ[illegible]　同如
鷲[illegible]　梅沈

出[illegible]の[illegible]　仝
山市晴[illegible]　之川
[illegible]　文宋
[illegible]の[illegible]　夕市
[illegible]　蕉笛
[illegible]　滝水
[illegible]　玉枝
[illegible]　北人

手をうつ時川はわしやタすまを　不汁
寒ゐ寒と名をるるやあをを　之仲
えれまのるるをちらり柳の宮　山視
撮を名や相坂をえて宮相撮　勇正
ゐはるの雲をまし雲水　友主
ちやすを名をつをるる芙蓉　尚流
志夫に簑笠いるしゐ月角　魚洋　而村
華舶の沈るるるや寄る色　呂柘

海ゥ考や翁の二つ名　朔日新　塚塔　吾秋
山風の移いるをへ高ちか　造本
おかをるやくを柳のまを　山柳　玉枝
名月や詩いを書まに久猿酒　之家
活くはを俗ゐるるるへ沖はを　宇中
えれ乃やタりのやに古るを　乃路
毛紙見て簾本に眠を俗ゐし　乙人
をり手に書れ折ひるるれ月　老文

さゝ笹や洗ひ流して長たこのま　一洗

数時のそゝ中敬ンてにおそ酒　フク光　馬雪

雇てまよるも起てゝ情火焼ル　ミノ　東羽

あつさくらと笹の葉涼しれの雪　フク光　有中

葉ル雪の世にわさまるや紫壇　日　汝上

雪や京ふらしに極の竹　山中　乗禁

茶のもれ白ひ紙ふて流るル　魚津　傍友

帰夫して物すると羽も帰まるる　金沢　孤舟

戸明まゝ人に明あるゝ鶏ル　仝

掃除する沙弥さんやまゝらくに　西弓

賛ふや涼掃ふ月う使ひに　抑子

十月紙ふ月さよ酒を見そさらル　見泡

七夕の紅年ゝるるや半に掃さるる　宇中

昔い秋ルをに歌ふし月の弓　伯　松宇

イカ雲や鬼のうらみ大江山　吟聴

鬼型の酒ゝ毛て掃の月ゝ　可夕

月のうしろに[illegible]や海[illegible]る　雨村（漁火）
初のむら薄四[illegible]陣に紅ゆりさま　理甫
涼風し一作　水[illegible]　春元
ふよ竹や百[illegible]こうのふ[illegible]　和什
[illegible]ひ[illegible]し沢やら人[illegible]る　逸松（生地）
秋の[illegible]に[illegible]　螺城（魚洋）
研だ[illegible]さ[illegible]に[illegible]や夕[illegible]　東園（井ナミ）
春の角[illegible]て[illegible]　右範（ミノ）

夕[illegible]や壁[illegible]　昌[illegible]

山王幸納

[illegible]の四[illegible]や[illegible]　演[illegible]
夕[illegible]や[illegible]　和什
名月の白[illegible]や[illegible]　之川
[illegible]　滋吹（石勤）
山[illegible]の[illegible]　蛙口
[illegible]　仙布（城端）

石のうへに夜神楽の火の
ちるを西坂もまのつるゝ
長明の大ユつゝひや　諫鼓
松の木の羽衣ちるゝ　可多
恨えい色と花ちる　城陽　七夕
雲ゆ月花雪深を月にいも加ら　乃路
雲拾しをやはつ神向　魚八洋　秋雄
をうるゝ袖の白玉やら拾　ウニ　吹雪

伊勢一ゑしら　見海
文宗
行衰て道のあるてやみ月を
清流もあるとゝ杜鵑　城端　七夕
ちるとゝ色の深や峯の宮　ミクニ　播東
深山ある身中ゑ玉ゆ　山中　飛塔
つゝ焼ゆ入て涼し石灯炉　石動　方竪
赤い雅をに雲を　フリ先　呂仙
雲り杉成世ちゑん　ゑ

[illegible] 乃家

万句 宮の巻追加

宮ゆまさ部[illegible]ゆ徒生揺 文宋

は 宮の巻追加

石宮や弦の左史花ゆゆ 宮 宇中

其 千人

打流れ柱杖に菓の花一輪

抓成徒ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ 房

月[illegible]ゆ[illegible]ゆ 可夕

ゆを二 全

[illegible]ゆ宮や伊珍信の北ゆ徒

部行 袖に影ハ[illegible]明 房

初汐に初地を[illegible]へ乃時ゆ 只三

其三

秋去や扇ふ拂ひ業の哀　文宋

四季に捨て常に月新　房

滝にする初ちるに席暖て　春元

其四

張会いかさもくるを一室案　兼吹

まつ人いかりとれたるの萩　房

朔の月籠の雄鳥も思ひに　何笠

三に酒ちを案れを逢ひ　和什

くるを所中に木瓜の杖　房

大津絵や寒の清るに新ぶて　二人

其六

抑も筆にしるしたんわさのつき　春元

高馬の沈と見る秋の野　房

はたすに彩の庵之月さして　文宋

六十七

夏近き空に笠ぬぎ月に業　只三

橋君柳を敷きつる時　房

鷹寄せ中絶ゆるのうるを陳　蒙吹

其八

雲掛をちこち絶て行や業の跡　之川

世さり月の名を訪坊　房

絶て鳴く程の腸に移の来て　玉弓

其九

之綿に菊の白きや雲の名　呂拓

山田をうる忍の絶を　房

百月も幸せ古に之合て　乃鈴

六十

袖墳につるるや袖に業の跡　何笠

双の海にのこる月うも　房

掘井ゝ駒の注むしーに鳴て　和什

元十一

野に咲てまるくなりぬる蓮　元弓

連ゝの日てゝ見ぬる松耳　房

二所に見ぬる月のもとにて　友玉

其十二

業平の秀歌百ぢをしめぬる面白し　全

木くの梅咲屋の猿ばち　房

指おもえ二ヒ三ヒ月　之川

其十三

千代治する文の行し業平も　宇中

胡蝶の実ぬにぬる袖山中　房

十三夜の月見ハ豆に昆布添て　品柯

元十四

撰集に業いつまでも金潜ル　乃彦

八夕暮まりて郭の子ども　房

浦士の芋堂にハ月ハ咲ちん　宇中

正德五乙未年正月吉日

京寺町通押小路下ル

橘屋治兵衛